

アイヌ民族の現在と歴史

—「民族共生象徴空間 ウポポイ」の開設に寄せて—

＜前回(第3回) その1「先住民族アイヌの現在と歴史」上の試み——アイヌ新法から日本書紀まで——の要点＞

I アイヌとは？——アイヌ民族とその文化——

呼称、地理、人口、身体的特徴、言語、宗教、生業(採集・狩猟・漁労)、集落(コタン)と家屋(チセ)、食生活、衣装と工芸(アイヌ紋様)、ユーカラなど口承伝承、舞踊、熊送り(イオマンテ)、送り儀礼(イワクテ・オプニレ)、墓葬など。

II アイヌの人々をめぐる最近の動向

古くからの民族的差別、明治以来の同化政策、単一民族国家観、1899(明治32)年に制定された「北海道旧土人保護法」。2019年「アイヌ新法」施行、「先住民族」と明記。

2020年7月12日、白老郡白老町ポロ湖畔に、民族共生象徴空間「ウポポイ」が、国立アイヌ民族博物館、国立民族共生公園および慰霊施設からなるナショナル・センターとして開設。

III アイヌ民族文化の形成を探る

アイヌ史の方法——狩猟・採集民(無文字民族)の歴史をどう明らかにするか？

その1 文献史・民俗学などにより、近世アイヌ文化を遡る。

19・18世紀(江戸時代)

松浦武四郎、間宮林蔵、近藤重蔵、最上徳内らの蝦夷地(アイヌ モシリ)探索、村上島之丞『蝦夷島奇観』などのアイヌ絵。

1720(享保5)年 新井白石『蝦夷志』 < 1687・8年の徳川光圀の蝦夷地探検

1669(寛文9)年のシャクシャインの戦い < 1731(享保16)年『津軽一統志』

中世における安倍、安藤、堀崎、武田、松前氏の北地支配の拡大 > 松前藩

1457(康正3)年のフシャミンの戦い < 1646(正保3)年『新羅之記録』

1482(成宗13、文明14)年『李朝実録』に見える「夷千島王返又の朝鮮遣使」

1356(延文1)年『諏訪大明神繪詞』に見える「蝦夷ヶ千嶋」

1264(至元1)年『元史』に見える「北の元寇」記事の「骨嵬」「吉里速」など

< 文永・弘安の役(元寇) >

12世紀(平安時代後期)の貴族の和歌などに見える蝦夷のイメージ 「えぞの毒矢」

奈良時代以前 『日本書紀』景行天皇27年条、同40年条、『同』齊明天皇5年「伊吉連博徳書」 なお、この頃「蝦夷」「蝦狄」「狄」「夷狄」などは「えみし」「えびす」と読まれた。

—これ以前は、確かな史料(文献資料)がない。「蝦夷アイヌ説・非アイヌ説」—

その2 北日本の人類史を下る

——考古学的にアイヌ文化の形成過程を求めて——

旧石器時代 —— 更新世(水河時代)に大型動物を狩る人々

縄文時代 —— 1万年以上続いた基層文化(16000年前～2500年前)

- 生物多様性に恵まれた日本列島全域に展開(大別6期に分類)
- 堅穴住居集落、貝塚、盛土・配石、墓葬
- 石鏃・弓矢、磨製石器、土器の製作・使用
- 土偶、石棒など心の道具にみる精神文化の発達
- 農耕・牧畜によらず、狩猟・採集により、戦争のない安定した定住集落生活
- 自然環境に適応し、じつに1万年以上にわたり、ゆるやかに文化を持続
- 現代日本の基層文化、列島に住む人間すべての「母なる文化」
- 弥生(父性的文化)の北上、遭遇、接触、摩擦、反発、混交。

縄縄文時代 ——北日本の独自性の形成——

- 米のクニ vs 熊・鹿・蛙のムラ > 列島における地域格差の形成
- 古墳・ヤマト勢力の北上と北方系土器文化の南下 > 本州からの鉄器の流入
——『斉明紀』安倍臣比羅夫の北航、肅慎との交戦(658(斉明4年)——
——東北地方出土の「赤彩球胴甕」の問題——

北大式・縄文土器文化とオホーツク文化

—— 蛙鱗を獲る縄文人と罌を祭る流水海の交易民オホーツク人

中世アイヌ文化の形成

- 内耳銅と土器の消滅 > 竈から炉へ > 堅穴から平地住居へ
- 厚真町での最近の目覚ましい発掘成果(震災を越えて)
 - * 堅穴式から平地式への過渡的形態の建物跡
 - * アイヌ土墳墓、鉄鏃、鉄製コイル状装飾品
 - * 12世紀後半の常滑焼の壺、佐波理碗

むすびにかえて——アイヌ史の課題——

- 1 アイヌ語地名はどう分布するか？
- 2 北方系土器の南下は何を語るか？
- 3 蝦夷・アイヌ論争は、その後どうなったか？
- 4 アイヌと縄文人との関係は？
- 5 アイヌ民族は列島の先住者か？
- 6 多様性と共生の尊重(単一民族国家神話の克服)
- 7 事実に基づき、歴史に学ぶことの大切さ。
- 8 アイヌ史関係遺跡群を世界遺産に！